

平成26年度
研究調査報告

【概要版】



四日市市教育委員会教育支援課

第395集 齋藤 徳顕

問題解決能力を育成する小学校社会科学習の研究

－「四日市モデル」に基づいた授業づくり－

第396集 永野 智美

「非連続型テキスト」を活用した「書くこと」の指導に関する研究

－授業モデルの構築とその効果－

第397集 市森 幸子 田中 敬子 渡辺 由紀

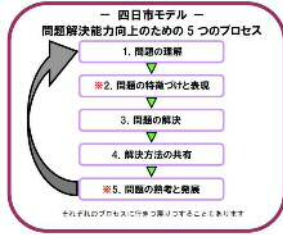
再登校を促す支援方法についての一考察

－適応指導教室における実践を通して－



1 研究の目的

「四日市モデル」に基づき、問題解決能力を育成する小学校社会科学の授業づくりの提案を目的とする。



2 研究の内容と方法

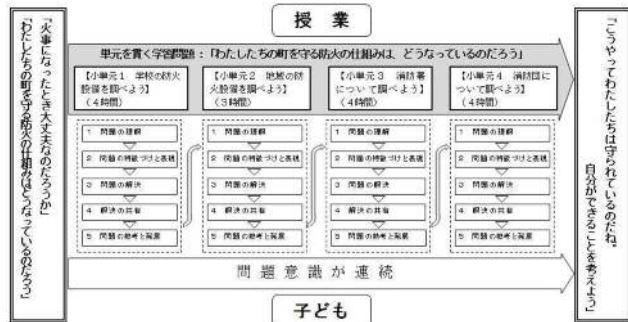
(1) 小学校社会科学習における「四日市モデル」の活用

問題解決能力を向上させる問題解決的な学習を行うために、「四日市モデル」の5つのプロセスの中でも、特に「2 問題の特徴づけと表現」「5 問題の熟考と発展」のプロセスを充実させ、授業づくりを行う。

(2) 「四日市モデル」に基づく小学校社会科学の授業づくり

① 単元のつくり方

子どもの問題意識が連続する単元構成とする。「単元の目標をつくる」「学習問題をつくる」「学習内容を配置する」「学習問題のつながり」の順に考える。下図は、本実践の単元図である。



「わたしたちの町を守る防火のしくみ」の単元図

② 5つのプロセスの展開

「1 問題の理解」「2 問題の特徴づけと表現」「3 問題の理解」「4 解決方法の共有」「5 問題の熟考と発展」の5つのプロセスで小単元の学習活動の展開を考える。

③ 充実させたい2つのプロセスでの手だて

○「2 問題の特徴づけと表現」の手だて

解決の見通しを持つためのプロセスで自分の考えを書き、他者と交流をする。子どもが、「何を、どのように調べたらよいか」を明確にし、自分の力で問題を追究・解決できるようにする。

○「5 問題の熟考と発展」の手だて

学習でわかったことを整理することで、子どもが新しい問題を見いだす。また、新しい事象に出合わせて、学んだことと比較したり関連付けたりする。そして、事象を理解するための資料や焦点化するための発問を考える。

(3) 検証データの収集と分析

① 見通しを持つことについて

解決の見通しを持つ場面でのルーブリックによる評価と児童の様子から検証する。

ルーブリックとは、子どものパフォーマンスの質を評価するための評価基準表のことである。

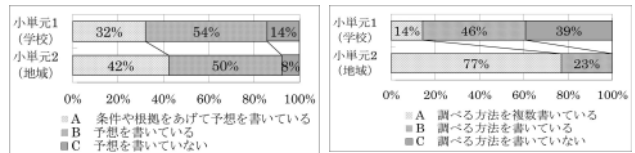
② 新しい問題を見いだすことについて

新しい問題を見いだす場面での児童の様子から検証する。

3 研究のまとめ

(1) 「四日市モデル」による授業実践の結果と考察

① 見通しを持つことについて



「予想」についてのルーブリックによる評価 「調べる方法」についてのルーブリックによる評価

問題解決の見通しにつながる「予想」と「調べる方法」の評価が上がってきている。「2 問題の特徴づけと表現」の手だてでは、解決の見通しを持つ際に有効であったと考える。

② 新しい問題を見いだすことについて

「5 問題の熟考と発展」の手だてにより、新しい問題を見いだしている児童がみられた。問題を見いだしながら、問題意識を連続させて学習することで問題解決能力の向上につながったと考える。

また、新しい問題を見いだすことの難しさも明らかとなった。事象を理解するための資料や焦点化する発問をさらに工夫する必要がある。

(2) 検証をもとにした授業プランの提案

小学校社会科学第4学年「ふせごう、交通事故と事件」の授業プランを提案する。(詳細は、本稿参照)

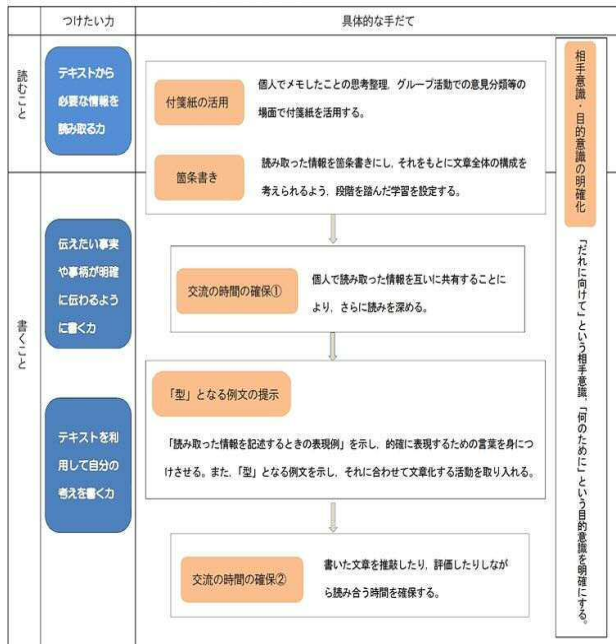
1 研究の目的

中学校国語科の「書くこと」の領域において、「非連続型テキスト」を活用した指導の授業モデルを構築し、その実践による効果を検証する。

2 研究の内容と方法

(1) 授業モデルの構築

「非連続型テキスト」とは、「データを視覚的に表現した図・グラフ、マトリクス、技術的な説明などの図、地図、書式など」のことである。テキストを単に読むだけではなく、テキストを利用したり、テキストに基づいて自分の考えを論じたりする「活用する力」が求められている。「読むこと」を「書くこと」への一連のプロセスととらえ、「読むこと」の活動の中で「書く力」をつける指導を組み立てていく必要があると考える。そこで、本研究では「非連続型テキスト」を活用し、「読むこと」と「書くこと」の関連を図った授業モデルを【図1】提案する。



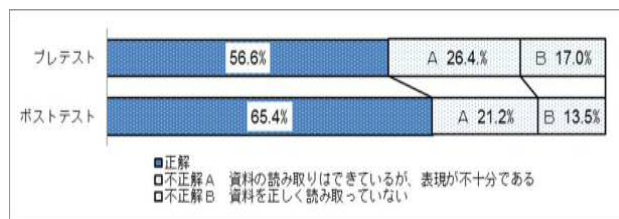
【図1】 「非連続型テキスト」を活用した「書くこと」の指導の授業モデル

(2) 効果の検証方法

検証授業前後に「資料を読み取る力」「書く力」の実態を把握するためのテストを実施し、その変容を比較・分析する。また、質問紙による調査を実施し、意識の変化を検証する。

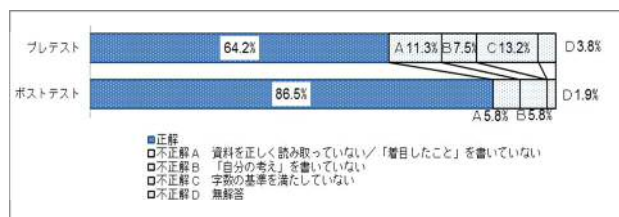
3 研究のまとめ

「つけない力」として、「テキストから必要な情報を読み取る力」「伝えたい事実や事柄が明確に伝わるように書く力」「テキストを利用して自分の考えを書く力」の3つを示し、全4時間の検証授業を行った。プレテストとポストテストの結果や生徒の感想等から、検証授業における一定の効果を示すデータを得ることができた。



【図2】 「テキストから必要な情報を読み取る力」

「伝えたい事実や事柄が明確に伝わるように書く力」



【図3】 「テキストを利用して自分の考えを書く力」

(1) 「テキストから必要な情報を読み取る力」

必要な情報を読み取るための方法を身につけることで、資料の活用に対する生徒の抵抗感を軽減することができた。「付箋紙の活用」や「箇条書き」により、生徒は資料の細かいところにまで目を向けられるようになった。必要な情報を正しく読み取る力を育成するための手だてとして有効であったと考える。

(2) 「伝えたい事実や事柄が正確に伝わるように書く力」

「テキストを利用して自分の考えを書く力」資料からの気づきはあるものの、それを表現することに難しさを感じる生徒は多い。「読み取った情報を記述するときの表現例」を使って書く活動を取り入れたことや、「型」となる例文を提示したことは、表現するうえでのヒントとなり効果的であった。

また、構成を工夫したり根拠を明らかにしたりして文章を書けるようになった生徒もいた。「付箋紙の活用」や「箇条書き」が、思考を整理し文章としてまとめる力を育成するための手だてとして有効であったと考える。

1 研究の目的

適応指導教室の通級生の課題を本人と共有し、集団に自ら適応していける力と自信を育むことが、課題を軽減させ、再登校の一助となるかを検証し、支援モデルの素案を作成することが目的である。

2 研究の内容と方法

(1) 過去3年間の学校復帰及び継続した部分登校の事例をもとに支援計画を立案する。

(2) 現在の通級生の状態を、指導員の観察及びアセスメントシートのチェックによって把握し、その結果から本研究の対象とする通級生（以下 対象生徒）を抽出する。

(3) 支援計画に沿って対象生徒の支援を実施し効果を検証する。

① 計画 (PLAN)

ア 対象生徒の社会性・耐性の状態を、心理を活用して把握する。

イ 対象生徒と指導員で課題を共有し、身につけたい力を検討する。

ウ 対象生徒の支援計画を指導員が立案する。

② 実施 (DO)

適応指導教室で課題改善に取り組む。

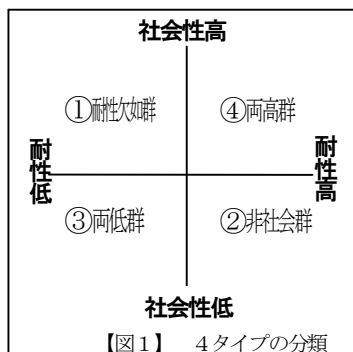
③ 評価 (SEE) 効果を検証する。

データは、1)過去3年間の事例のデータ、2)現在の通級生全員のデータ、3)対象生徒のデータをもとにしている。対象生徒の心理尺度等の数値の変化や対象生徒の言動や指導員の観察から、具体的な手立てに対して効果があったか総合的に分析・考察する。

3 研究の結果と考察

(1) 過去3年間の学校復帰及び継続した部分登校の事例

過去3年間のデータを「社会性」と「耐性」を主軸に4タイプに分類した【図1】。そのことで、感覚として捉えていたことが、指導員間で共通理解でき、また、同じツールを使うことで、生徒の強みと弱みがわかり支援すべき優先課題がはっきりした。対象生徒にもその分類を活用したが、支援途中で当初の見立てを修正することが多くなった。今後は年度末にデータを分類し、支援の手立てを蓄積していくことがより良い支援につながると考える。



(2) 対象生徒への手立ての実施
「集団に自ら適応していける力と自信を育む」こ

とを目標に、「人に伝える力」「自分の生活を振り返り、改善する力」「自分を肯定して受け入れられる力」「他者の考えを理解する力」の4つを獲得できるよう支援した。この中から、「人に伝える力」を例としてあげる。

①伝えたい内容を紙に書き出し、伝わりやすい言葉に変換したり、伝える順番を入れ替えたりして整理する。

②指導員とロールプレイングをして練習をする。

③実行に移した場面をイメージさせ、予想される不安をあげる。

④不安を減らす方法を考える。

以上のような手順で行い、相手に伝わりやすい方法を身に付けることができた。また、紙に書き出し可視化したことで、生徒のなかの漠然とした不安を整理できる効果があった。

(3) 支援を通して

自分の課題を自覚することは、自分の苦手な部分に向き合うことになるが、指導員とともに投げ出さずに取り組むことができた。指導者側から与えられた課題では、実際の生活場面に応用したり、本人が自分で意識し改善を目指したりすることは難しいと考える。本人の主体的な行動が大きな意味をもつと考える。


4 研究のまとめ

(1) 成果

通級生の課題を明確にするために、心理尺度やアセスメントシートを用いた。それらを活用することで、客観的に通級生の状態を把握することができた。タイプ別に個別の支援計画を立て、スキルトレーニングを実施したことで、集団に適応していける力や自信を、部分的にはあるが育むことができ、再登校の一助となったと考える。今後のきめ細かい支援ができるように、支援モデルの素案として、年間計画と支援方法を作成した。

(2) 課題

今年度は短期間の実践のため、継続した登校を促すまでには至らなかった。しかし、「集団に自ら適応していける力や自信」を育てることは、進級や進学の際に、再登校する一助になり、また、社会復帰後は継続した就労へとつながっていくと考える。ただし、欠席が長期化するほど、その間の学習の遅れや対人関係の変化等があり、学校復帰は容易ではないため、未然防止の視点を持ち、不登校状態になる前の段階で、このようなスキルトレーニングが行える場や機会が必要だと考える。



各研究の詳しい内容は、四日市市立教育センター
ホームページをご覧ください。
URL http://www.yokkaichi.ed.jp/e-center/nc3/htdocs/?page_id=36

